

『イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。17 預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある個所が目にとまった。18 「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、19 主の恵みの年を告げるためである。」20 イエスは巻物を巻き、係の者に返して席に座られた。会堂にいるすべての人の目がイエスに注がれていた。21 そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。22 皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った。「この人はヨセフの子ではないか。」23 イエスは言われた。「きっと、あなたがたは、『医者よ、自分自身を治せ』ということわざを引いて、『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ』と言うにちがいない。」24 そして、言われた。「はっきりしておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。25 確かにしておく。エリヤの時代に三年六か月の間、雨が降らず、その地方一帯に大飢饉が起こったとき、イスラエルには多くのやもめがいたが、26 エリヤはその中のだれのもとにも遣わされず、シドン地方のサレプタのやもめのもとにだけ遣わされた。27 また、預言者エリシャの時代に、イスラエルには重い皮膚病を患っている人が多くいたが、シリア人ナアマンのほかはだれも清くされなかった。」28 これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、29 総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。30 しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。』

#### 【説教】

今日の聖書の言葉は、一番最初の頃のイエスさまの宣教の様子が記されています。イエスさまは、ご自分の故郷であったナザレの町を尋ねられました。そこでの礼拝の時に、聖書の朗読を通して救い主としてのご自分の役割をはっきりと示されました。その役割というのは何かと言いますと、「貧しい人」に福音を告げ知らせることだとおっしゃいます。この場合「貧しい人」というのは、一体どのような人々のことを指しているのでしょうか。文字通り経済的に貧しい人のことなのか。それとも貧しいというのは例えであって、いろんな意味で貧しく、心の貧しいということも入るような貧しさなのか。この意味の取り方の違いによって、私たちの聖書の言葉の聞き方がずいぶん変わってくると思います。自分が救い主の言葉を聞く対象に入っているのか入っていないのか、大変気になるところだと思います。

「貧しい人」が誰なのか知る手がかりとして、この箇所ではイエスさまがナザレの人々に向かって話した旧約時代に救われた人々のことが参考になります。一人は女性で、シドン地方サレプタのやもめを挙げています。やもめというのは夫のいない未亡人、寡婦のことです。こちらはやはり経済的な貧しさということを想定できると思います。もう一人は男性で、シリア人ナアマンという人をイエスさまはあげています。ナアマンの方ですが、こちらは王様の次に偉い大臣です。つまり経済的な貧しさではなく、何か別の苦しさから救われた人物です。ということで、ここだけ見てもイエスさまがおっしゃる貧しさというのは、貧乏ということだけではないことがわかります。いろんな意味で満たされず、飢え渴くといった私たちが人生で負います重荷のすべてを「貧しい」のだと現していると考えられるわけです。

イエスさまが解放してくださる囚われている状態というのは、借金の重荷だけではなく、人になかなか理解してもらえないような、心の中でずっと自分を縛って圧迫しているような重荷も含まれています。また視力を回復させてくださり目が見えるようになる状態というのは、心の目が開かれるといったことをも同時に表しています。ずっと後のところですが、そこでは闇から光に移され、新しく世界を見ることができるようになったことを目が開かれたと表現されています(使徒言行録 26:8)。

ここでもイエスさまは、「医者」という言葉を使っていますが(23節)、イエスさまはご自分を医者に譬えられるのです。そしていろんな種類の重荷を背負っている貧しい人を、「病人」に譬えられます(ルカ5:31)。医者は患者の病状に合わせて、適切な処置をして行きます。その患者さんを苦しめているものは、何であろうかと探って行くのです。この人は一体何に縛られ、圧迫されているのか。苦しめられている要因を取り除こうと、患者の立場になって考えてくれます。そしてその患者が陥ってしまっている物の見方の誤りを、気づけるように接してくれます。そして適切なものの見方、振る舞い方に移れるようにアドバイスして行きます。

しかし、ここで問題が起こることがあります。全ての患者が、医師を信頼し治療者と共に病気を治そうとは、取り組まないということが起こります。ナザレの人々は、はじめイエスさまの語られる言葉を喜び驚いて聞いていました。「なんて素晴らしいことを教えてくれるんだろう」、そう言ってイエスさまを褒めました。しかし、同時に医者の言葉を、素直に受け取れない反応もしてしまいます。22節のところを見てもらいたいのですが、ここでは皆イエスさまを褒め、驚いて言ったとあります。しかし、すぐ間を置くことなく、「この人はヨセフの子ではないか?!」と急転してイエスさまを拒否し出します。この二つの反応に、「しかし」という言葉を入れると、この両極端な人々の反応の様子がよくわかると思います。

こういうことは実際、医師と患者の間にはよく起こることです。患者は病気を治したいという思いもありますが、一方で自分が病気であることを認めたくないという思いもあります。ちょうど人生がうまく行かず行き詰っているのに、そのことを見ようとせずはまだ自分は大丈夫なんだと思うことと似ています。病気の治療には苦痛が伴います。その痛みを避けるために、医師から逃げたいという思いも患者にはあるのですね。

こういう話を聞いたことがあります。恵まれた環境で育つことができずに、誰も信用できない患者さんがいました。治療者はなんとかその人に心を開いてもらって、治療に協力してもらおうとします。しかし、その患者さんはまるでハリネズミのように自分に触れるものに対して刺々しく接して来ます。そのような時、医師はどうするのかと言いますと、まず自分が「はだか」になることが大切だと言います。鎧を着ながら接しても、決して相手は心を開いてくれません。ですから、まず自分から無防備になって、危害を加えるのではないということを示さなければなりません。しかし、それでもなかなか信用してもらえません。それだけ、大きな意味でのその人の人生の病は重症なのです。そこでどうするのかと言いますと、治療者はそのはだかの生身のまま、ハリネズミのからだを抱きしめます。当然治療者は血を流すことになります。しかし、その流れた血が、ハリネズミの深い傷を癒すのです。

イエスさまはここでナザレの人々に、崖から落とされて殺されそうになります。そして実際にこの後、十字架につけられて血を流されました(ルカ 23:46)。この宣教の初めのナザレでは、「医者よ、自分自身を治せ」と、あなたたちは言うでしょうとあります。それは、宣教の一番最後になる十字架に付けられた時に、本当にそう言われることになります。「あなたは、メシア(救い主)ではないか。自分自身を救ってみよ」、そうとげとげしい言葉をぶつけられます(ルカ 23:39)。つまり、最初から最後まで治療者イエスは、患者たちの治療を拒絶してしまう抵抗を受けておられたのです。私は先ほどのハリネズミの話が、ちょうどこの治療者としてのイエスさまの流された血の意味と重なるのではないかと、そう思いました。

大きな人生の重荷を背負わされている人は、簡単に人の言葉を信用することはできません。たとえそれが、神の口から発せられる神の言葉であってもそうなのです。ナザレの人々もそのような何か大きな苦しみを、随分と長いこと背負っていたのかもしれませんが。イエスさまの言葉を喜んで歓迎する思いと、それを素直に受け取れず反発してしまう思いが同居しています。その反発する力はもの凄く強く、神の子であるつまり神ご自身であられる存在に対して、殺してしまいたいというほどの心の葛藤を生み出すのです。イエスさまが担われた十字架は、そのような私たち人間の全ての種類の重荷であられました。神を殺そうとする神殺しのその深い罪さえも、神の子はその体に受け止められたのです。

私たちは、このことを通してイエス・キリストという救い主・お医者さまが、どんなに信頼に足る方なのか気づかされるのではないのでしょうか。患者にまず必要なことは、この治療者を信頼することです。この世界で一番最良の医師が教えてくださるその言葉に、私たちの行く末を、未来を全てお委ねすることがなによりも肝心です。そして、治療をさらに効果的にするには、良い医者だけいればいいというわけではありませんね。医師に信頼して、その語る言葉を理解し、納得して受け入れる患者の方の応答も大切なのです。どんなに腕の良い名医でも、治療に協力をしてくれない患者さんを治すことは難しいでしょう。

この聖書箇所の後を進んで読んで行きますと、イエスさまによって病が癒されて行く人々がたくさん出てきます。その中に例えば12年の間出血が止まらないで、いろんな医者を使い果たしましたが、しかし誰も治してくれない女性がいました(ルカ 8:43)。イエスさまはこの女性を癒し、その苦しみから解放しました。その時このようにその女性に言います。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」つまり患者であるその女性が、治療者であるイエスさまを深く信頼したことが高く評価されているのです。信仰というのは神さまの、イエス・キリストの癒す力、回復させてくれる力を信じるということです。それは治療者だけの働きかけだけではなく、患者の方もそれに応じることも含まれています。神と人が一つとなり、歩幅を合わせて重荷から解放されることを共に切に望むところに、神の霊が最もよく働きます。治療者と患者の二人三脚の歩み。これが私たち人間が抱える病を癒やしてくれます。

苦しみのあまりに暴れてしまう患者を包み込み、抱きしめてくださる贖い主が、私たちの主治医です。この医師は、疑いながらも素直に聞けないながらも、しぶしぶでもご自分に付いてくるような患者でも、それでも喜んでくださいます。そして、少しずつでも信頼し、心を開いて行くことを本当に喜んで下さいます。ですので、患者は焦ることなく医師と共に歩み続けていくことが出来るのです。

今日、この神さまの救いの業、恵みの時が、私たちの耳を通して私たちの中にある霊に届きますよう共に祈りましょう。